

No	元所蔵者 類番号	書名	ヨミ	所蔵巻	著編訳刊者	発行年	発行西暦	分野	解説	関係者紹介	用語解説
1	深味 1	傷寒論集成	ショウカンロンシュウセイ	首巻、1-10巻	山田図南著	享和2	1802		「鈴木氏」との書き込みあり。寛政年間、江戸中期折衷学派の山田図南の著書、彼は衆説を折衷して穏当なものを取ることを基本とし古医方及び後世派と鼎立した。図南は幕府医官、好んで傷寒論を読み、諸家の註釈を集め、正要を摘み、一字の教訓も参考にし確当を究めて傷寒論集成を著した。		
2	深味 4+5	傷寒論集成	ショウカンロンシュウセイ	首巻、1-10巻	山田図南著	享和2	1802		能代北嶋家の蔵書、「北嶋杏庵主人」(春三)の署名あり。寛政年間、江戸中期折衷学派の山田図南の著書、彼は衆説を折衷して穏当なものを取ることを基本とし古医方及び後世派と鼎立した。図南は幕府医官、好んで傷寒論を読み、諸家の註釈を集め、正要を摘み、一字の教訓も参考にし確当を究めて傷寒論集成を著した。		
3	深味 2	編註金匱要略	ヘンチュウキンキョウリヤク	1-14、19-24巻	張仲景著、沈明宗編	享保17	1732		内題に「金匱要略玉函經」と記してあるが張仲景の支那の医書である。我が国の折衷学派はこの本をよく用いた。		
4	深味 3	局方發揮診解	キョクホウハツキゲンカイ	1、4-6巻	岡本一抱撰	宝永5	1708		支那の李東垣の医書で李朱医学の基をなした。寛永5年、法橋岡本為竹一抱子の撰で白井元隆が刊行した。岡本一抱子は近松門左衛門の弟である。	岡本一抱(一得齋)(1686~1754)江戸中期の医者。京都に生まれる。号は一得齋。通称は為竹。本姓は杉森氏。祖父は豊臣秀吉の医者、父受慶は福井藩の医者。兄は近松門左衛門。明の『内経』考証注解の動きを日本に広めた饗庭東庵門の味岡三伯に師事。のちに師と離れ、主に難解な医書を仮名交じりで平易に解説した『診解書』を著し、広い人気を獲得した。兄の近松門左衛門から、インスタント医者増加の原因になると批判されてから、その業を断ったというが、医書の普及に功があったことは否定できない。〈著作〉『医学正伝或問診解』『運氣論診解』『医方大成論診解』〈参考文献〉矢教圭堂『近世漢方医学書集成』7巻解説』〈出典〉『朝日日本歴史人物事典』	
5	深味 3	十四経絡和語鈔	ジュウシケイラクワゴショウ	序、1-6巻	岡本一抱撰	元禄6	1693		十四経絡發揮和解。元禄6年正月、京都書肆 堀河通 小佐治半右エ門が出版した。有名な支那の医書の邦訳である。		
6	深味 4	婦嬰新説	フエイシンセツ	上・下巻	ホブソン(Hobson,合信)著、管茂材撰	咸豊8	1858	産科	上海・仁済医館蔵板、咸豊8年、英医合信ホブソン(Hobson)が支那の医人に産孕の理を講明する為に著述したもので簡約に説明してある。	三宅良齋(1817-1869)肥前の人。長崎で8年間櫛林宗建に師事し、22歳で江戸業研堀で開業翌年銚子に移った。堀田侯の陰囊水腫、山内侯の鞏丸剥出手術を行っている。安政5年、江戸の西洋医50余人と共に種痘館を開いて頭取となり、文久年間医学所教授をつとめた。慶応4年52歳で没。ホブソン(1816-1873)英国ウエルフォードWelford生まれ。詳しくは『金沢大学附属図書館報こたま』136.p4-5「黒川良安旧蔵の合信著『婦嬰新説』』を参照。	
7	深味 6	無冤録述	ムエンロクジュツ	上・下巻	王与著、河合尚久鈔訳	明和5	1768	法医	江戸時代中期の法医学書である。土肥図書印が押してあるが、この人物の経歴は不明である。支那の元の武宗の至大元年(1308)に王与が、それまでの「洗冤録」「平冤録」の二書を折衷して無冤録を出版した。獄を断ずるに当たり最も必要とするのは検死で、それには一定の順序を立て、勒死ロクシ(絞殺)と自縊を鑑別し、水に落ちて死んだものと殺して水中に投じたものを区別し、また創傷の生前に生じたものと死後に生じたものを鑑別すること等をはじめ、災死、頓死、中毒死などに就いて論述している。明和5年刊行のものは刊行した人物は不明、元文元年(1736)泉州の河合尚久が鈔訳して二巻として梓行したものが広く世に行われた。		
8	深味 6	錦囊外療秘録	キンノウゲリョウヒロク		林子伯著	明和9	1772	外科	江戸時代後期の外科書、林子伯が明和9年に刊行し、治術は薬方をあげるのみで手術には及んでいない。後世派経験良法としている。天明4年改版、浪速書肆 古文字屋市兵衛刊行。		

9	深味	6	丹水子	タンスイシ	下巻	名古屋玄医著	貞享5	1688	医学経緯	古医方の名古屋玄医の著書、貞享5年正月刊、医学に関する随筆。玄医の学説は張仲景を祖とし、後世の李・朱等の医学を排斥し、傷寒論を基本としている。「百病はみな風、寒、湿より生ず、総言すれば即ち唯一個の寒気のみ、故に百病はみな寒に傷ぶらるるにより生ずるものなり」と論じ、治療は温熱の剤を本とし衛気を助けるを主とした。	名古屋玄医(1628～1696)江戸時代前期の医師。寛永5年3月21日生まれ。はじめ経書をおさめ、のち明(みん)(中国)の「傷寒尚論」などの医学典籍にまなぶ。張仲景らの考えにならい、独自の生命観にもとづき古医方をおもじした。門下に並河天民らがいる。元禄(げんろく)9年4月18日死去。69歳。京都出身。字(あざな)は富潤・閔甫。号は丹水子、宜春庵、桐溪。著作に「金匱(きんぎ)註解」「医方問余」など。〈出典〉『デジタル版 日本人人名大辞典+Plus』講談社
10	深味	7	蕉窓方意解	ショウソウホウイカイ	天・地巻	和田東郭述	天保7	1836		和田東郭著、小柴胡湯以下の処方解説書である。門人宇和島、久保喬徳が筆記している。	和田東郭(1744～1803)江戸時代中期-後期の医師。延享元年8月12日生まれ。摂津高槻(たかつき)藩(大阪府)藩医和田祇忠(やすただ)の3男。戸田旭山(きよくざん)、吉益(よします)東洞にまなび、京都で開業。寛政9年朝廷の医官となった。諸家の医術をとりいれ、折衷派の大家となった。享和3年8月2日死去。60歳。名は璞(はく)。字(あざな)は韞卿(うんきょう)、泰純。別号に含章齋。著作に「導水瑣言」「蕉窓医譚」など。【格言など】世医ややもすれば簡を以て粗と為し、繁を以て精と為す。哀しきかな(「蕉窓雑話」)〈出典〉『デジタル版 日本人人名大辞典+Plus』講談社
11	深味	6	導水瑣言	ドウスイサゲン		和田東郭述	文化4	1807	水腫	東郭和田先生口授、男哲筆受、男銅校と記されている。各種水腫の治方に就いて述べている。文化4年、星都書肆林喜兵衛が発行した。	
12	深味	8	医療真元要方	イリョウシンゲンヨウホウ	上・中・下巻		寛政8	1796	薬学	内題に医学研究玄玄書、薬方全書、古方後世方経験とある。古方、後世方 経験を述べている。樋渡氏蔵の印がある。	後世方:
13	深味	15	戴曼公先生痘疹唇舌口訣	タイマンコウセンセトウシンセンゼツクツク	上巻	戴曼公述	不明		痘科	手稿本。支那の医書。我国の痘科の専門家池田直立が筆記したもの。	戴曼公は明の人で龔延賢の弟子である。来日して長崎や岩国に住み吉川氏の臣池田氏の師となった。のち隠元和尚の坐下に帰して雑髪し、名を性易と改め字を独立といった。寛文12年11月病歿、77才。曼公から痘科の教えを受けたのは池田直正で、その子信立、孫正明、とその教えを伝え、曾孫瑞仙に至って名声天下に顕れ召されて幕府の医官となった。『秋田の医史』p.64。
14	深味	6	牛痘發蒙	ギユウトウハツモウ		桑田和著	嘉永2	1849	痘科	嘉永2年に出版された桑田和の著書。種痘に関する本で自然痘、種痘噴鼻法、種痘刺法、種痘発蒙法に就いて記述している。	
15	深味	6	散花錦囊	サンカキンノウ	上・下巻	緒方郁蔵(洪庵)訳	嘉永3	1850	痘科	嘉永三年、緒方郁蔵(洪庵)の訳した種痘の本。Tkasoeの印が押してある。	緒方洪庵(1809～1863)備中足守の人。15歳で大阪の中天游について西洋医学を学び、後江戸の坪井信道の門に入り塾長となり3年間長崎で蘭人に学んだのち天保9年大阪で塾を開いて盛名あり、幕府の招きにより文久2年江戸に出て待医法眼となり、西洋医学所頭取になった。門人千余人、54歳で没。
16	深味	5	牛痘辨論	ギユウトウベンロン		林義衛述	明治8	1875	痘科	若松県林義衛纂述。明治8年12月出版された種痘の解説書。明治初年、種痘の普及は新政府の重大政策の一つであったが、布達と共に牛痘の正しい知識を医師に与える必要があった。本書はジェンナーの発明した種痘法を詳細に解説したものである。『秋田の医史』p.63。北嶋の印が押してある。	
17	深味	15	産科記聞	サンカキブン	2,3巻	賀川某述	不明		産科	手稿本。賀川先生口授。賀川流産科の講義を筆記したもの。著者ははっきりしない。	賀川玄迪(1739～1779)江戸時代中期の医師。元文4年生まれ。京都で賀川玄悦にまなんで賀川家の養子にはいり、阿波(あわ)徳島藩の藩医となる。安永4年(1775)玄悦の「子玄子産論」を増補して「産論翼」をあらわし、賀川流産科をととのえた。安永8年10月8日死去。41歳。出羽(でわ)秋田出身。本姓は岡本。字(あざな)は子啓。号は有齋。〈出典〉『デジタル版 日本人人名大辞典+Plus』講談社
18	深味	9	医学切要指南	イガクセツヨウシナン	中巻	岡本一抱撰	正徳4	1714		岡本一抱子撰。北嶋貞无の署名あり。	
19	深味	8	盈科堂試験方読辨解	シケンホウドクベンカイ			不明		漢方	手稿本。漢方処方の解説書、医術試験受験の為の参考書であろうか。「北嶋文敬」「北嶋久教」の署名あり。	

20	深味	7	金瘡師語録	キンソウシゴロク			不明	外科	手稿本、金瘡の処置治療を解説している。銃砲刀剣など戦時の創傷治療から始まった金瘡は時代が進むにつれ一般外科、皮膚科、産科も手がける様になった。栗崎正羽が享保6年に出版した。		
21	深味	4	蕉窓雑語	ショウソウザツゴ		和田東郭述	文政4	1821	手稿本。和田東郭の教えを門人が筆記したもの。講義録の様な形式である。地に「一之篇口」とあり。『蕉窓雑話』の誤記？		
22	深味	9	救民妙薬	キュウミンミョウヤク		穂積甫庵撰、小川茂庵写	宝暦8	1758	手稿本。僻地などで医師のいない地域の人の為に救急の薬を説明してある。中風にはじまり130のケースに民間薬を紹介しているが、しゃっくりに柿のヘタを用いるなど周知のもの外、次の如きものも書かれている。○蟹ノ毒ニ中リタルニシツ又ハ冬瓜ヲセンジテ用フ ○鼠咬 猫のクロヤキ酒ニテ用フ ○鼠ノ小便目ニ入ルニ猫のヨダレヨシ ○痔ノ薬、蝮ノセンジ汁ニテ洗イテヨシ ○テンカンヤミの薬 ヒキカエル黒焼粉ニシテ用フ ○疝氣寸白ノ薬 山茶花ノ薬20枚硫黄3分センジ用フ ○めまいの薬 山梔子黒焼ニシテ用フ 率ね周辺にある草木を主に用いた様であるが墮胎の薬も記されている。食合せもソバにイノシシ、フナにサトウ、カモにミルクなど数多い。元禄年間に常陽水戸府医士穂積氏甫庵宋與が撰し、宝暦八年五月吉日小川氏茂庵が写したものをらしい。		
23	深味	不明	本草綱目	ホンソウコウモク	45冊				本草学は我国で昔から盛んであったが、中世戦乱の頃廃れ、江戸時代慶長11年(1606)林道春が長崎から李時珍の「本草綱目」を携え帰って幕府に献じてから再び隆盛となった。新井白石の「詩経名物図」寺島良安の「和漢三才図」平野必大の「本朝食鑑」など相次いで出されたがその説は率ね「本草綱目」によっている。わが国独自の本草学の基を開いたのは貝原益軒の「大和本草」宝永6年(1709)に始まる。次いで稻生若水、松岡恕庵が大いに発展させ、江戸時代後期に小野蘭山が現れて「本草綱目啓蒙」48巻を著し、1882種類を詳記しわが国の本草学を大成した。		
24	深味	10	洋漢病名一覧	ヨウカンビョウメイイチラン	前・後編	栗原順庵纂述	明治11	1878	大久保適齋聞、群馬県士族栗原順庵纂述、明治11年3月出版。漢方医に西洋医学を学ばせる為に作られた。秋田病院の印あり。		
25	深味	5	醫事叢談	イジソウダン	3巻	玄門山宥範述	不明		玄門山宥範述、男、山下専令筆記とあり、江戸時代終期に出版されたものらしい。「当今世間ニ流布スル蘭医ノ内科ヲ見ルニ……………殊更漢医ノ手ニ治セザル病ハ彼ガ手ニ治タルヲ見ズ、但外治ノ手術ハ良奇ナルコトモホ見及ベリ……………」と西洋医学一辺倒の風潮に水をさしている。		
26	深味	7	病学通論	ビョウガクツウロン	2、3巻	緒方洪庵訳	嘉永2	1849	all gemeine Pathologieの訳で、以前は原病学と称されたが、緒方洪庵は病学と訳した。フーフランド、コンスブリック、コンラディ等の書を参考にした。嘉永二年正月刊。病理学書のはじめ。		
27	深味	11	袖珍薬説	シュウチンヤクセツ	初、中、下巻	ウエーゼス(慧絶)編、桑田衡平訳	明治3	1870	亜国医員慧絶ウエーゼス氏が1866年編纂したポケットドースブック(医家掌中分量考)を桑田衡平が訳して明治3年に出版したものの。秋田病院の印あり。		桑田衡平(1836-1905)幕末-明治時代の医師。天保(てんぽう)7年6月生まれ。杉田玄端らに蘭学をまなび、桑田立齋(りゅうさい)の娘婿となって文久2年(1862)江戸で開業。英米医学を研究し、維新後は兵部省、内務省などにつとめた。明治38年10月24日死去。70歳。武蔵(むさし)高麗(こま)郡(埼玉県)出身。本姓は久保田。号は省庵。訳書に「袖珍薬説」など。〈出典〉『デジタル版 日本人人名大辞典+Plus』講談社
28	深味	10	七新薬	シチシンヤク	上、中、下巻	司馬凌海著	文久2	1862	文久二年(1862)刊。司馬凌海が朋百ボンベの説により7種の新薬をあげてその作用を論じたもの。7種の新薬とは沃頓(ヨデイウム)、硝酸銀、酒石酸ニ銻(吐酒石)、規尼(キニーネ)、珊多尼(サントニン)、莫非(モルヒネ)、肝油である。秋田医学校及び秋田病院の印が押してある。		
29	深味	10	理札氏薬物学	リレイシヤクブツガク	1-17巻	戒施理札著、小林義直訳	明治5	1872	司馬盈之闕、備後福山、小林義直訳、戒施理札の原著を訳して明治8年11月27日出版した。全国の医学学校で広く用いられた。秋田病院の印がある。		
30	深味	9	薬剂学	ヤクザイガク			不明	薬学	materia medica の訳書、明治初年のものであろう。本の欄外に註記極めて多く、禁販売とあるから教師用のものであろう。本の中に処方箋と思われる紙片があった。那小屋大助は秋田医学校教諭である		

31	深味	12	撒善篤繻帶式	サルゼントホウタイシキ	2冊	サルゼント(撒善篤, Sargent Percy Wiliam George) 著 横井信之訳	明治5	1872	看護	1869年のサンゼントの外科書の中の繻帯編を訳した。大坂医学校官板。米国撒善篤氏著、日本横井信之訳とあり、明治5年出版された。病院、秋田医学校の印あり。			
32	深味	9	医療大成	イリョウタイセイ		丹涅爾著、司馬盈之、坪井為春訳	明治6	1873	薬学	1870年英丹涅爾氏の著した治科書の薬劑編を訳して文部省学務局が明治6年刊行した。秋田医学校の印あり。			
33	深味	12	検尿要訣	ケンニョウヨウケツ		足立寛訳	不明			大助教、足立寛訳述、文部省官板。病院の印あり、発行日不明であるが、明治初年医学生教育の為に作られたものであろう。			
34	深味	13	内科闡微	ナイカセンビ		嘉約翰(Kerr, John Glasgow) 訳 林湘東 坪井信長訳	明治7	1874	内科	診断学の本。美国嘉約翰口訳を清国林湘東が筆述し、それを坪井信長が再訳して明治7年出版した。深味の印が押してある。	坪井信長(1823-1904)幕末明治期の蘭方医。越中国(富山県)高岡生まれ。佐渡養順の次男。幼名は末三郎、字は良益、のちに信良、号は榕里、初白。天保11(1840)年京都の小石元瑞に、のち江戸で坪井信道、大坂で緒方洪庵に医学を学んだ。弘化1(1844)年9月坪井信道の養子となった。福井藩主松平春岳の侍医兼藩校の教師、幕府の番書調所教授補を経て、元治1(1864)年幕府の奥医師、次いで法眼となった。明治7(1874)年12月東京府病院長に就任し、10年に退官。6年11月わが国で最初の医学雑誌『和蘭医事雑誌』を創刊し、8年12月までに43号を発刊した。訳書に『カンスタット内科書』『新薬百品考』がある。〈参考文献〉齋藤祥男『蘭医家坪井の系譜と芳治』〈出典〉『朝日日本歴史人物事典』		
35	深味	5	外科手術	ゲカシュジュツ	上・下巻	田代基徳編	明治6	1873	外科	田代基徳が纂述し明治6年10月出版、秋田病院の印あり。	田代基徳(1800~1897)豊前中津の人。緒方洪庵に蘭学を学び大学東校(東大の前身)で教鞭をとり、ついで陸軍に出仕、陸軍々医学校長を経て一等軍医正となった。明治30年没。		
36	深味	5	日講記聞 産科論	ニッコウキブンサンカロン	1、2巻	エレメンズ(越児蔑噠斯)述、高橋正純訳	明治8	1875	産科	蘭医越児蔑噠斯(エレメンズ)講。日本 高橋正純訳とあり、大阪公立病院蔵板、明治8年6月出版された。産婆のための講義で妊娠(みもち)、子宮(こぶくろ)、会陰(ありのとわたり)の如く、ふりがな付である。秋田病院、秋田医学校の印あり。			
37	深味	11	産科摘要	カシサンカテキョウ	1-3巻	ヘンリー・ハルツホルン編、小林義直訳	明治6	1873	産科	米国ペンシルベニア府健全学教頭ヘンリー・ハルツホルン編の本を小林義直が訳して明治6年3月に出版した。病院の印あり。			
38	深味	13	弗氏生理書	ホシセイリシヨ	1-7巻	ホユテソン(弗知遜)著、坪井為春、小林義直訳	明治8	1875	生理	1872年アメリカの弗知遜ホユテチソン氏が著した本を坪井為春と小林義直が訳し明治8年7月文部省から刊行された。定価1円20銭、今の看護学校教科書と同様に各篇の終りに試験問題が書いてある。秋田病院、秋田医学校の印がある。	坪井為春(1824-1886)幕末-明治時代の医師。文政7年生まれ。江戸にでて坪井信道(しんどう)にまなび、その養子となる。薩摩(さつま)鹿児島藩医、幕府の番書調所手伝、西洋医学所教授などをつとめた。明治11年埼玉県立医学校長。明治19年3月30日死去。63歳。出羽(でわ)米沢(山形県)出身。本姓は大木。名は忠益。号は芳洲。通称は「ためはる」ともよむ。訳書に「医療新書」など。小林義直(1844-1905)明治時代の医師、蘭学者。天保(てんぽう)15年8月8日生まれ。もと備後(びんご)(広島県)福山藩士。藩儒江本繁太郎に儒学を、寺地舟里に蘭学をまなぶ。明治5年大学東校(現東大医学部)大助教となる。のち著述に専念。明治38年8月6日死去。62歳。名は源直。訳書に「内科必携理學診断法」など。〈出典〉『デジタル版 日本人人名大辞典+Plus』 講談社		
39	深味	8	製剤備考	セイザイビコウ	乾・坤巻	室町温興編	明治6	1873	薬学	1867年ロンドン局方を室町温興が纂輯し明治6年に出版した。煎剤、浸剤、丁幾剤、精剤、酒剤、水剤、軟膏、丸剤、散剤などに分類している。病院、秋田病院の印あり。			
40	深味	9	消毒新論	ショウドクシンロン		撒善篤撰、島田修海訳	明治7	1874		1873年英国撒善篤氏の撰した本を島田修海が訳して明治7年10月刊行した。各種消毒薬、毒虫、毒蛇、狂犬、溺死、ガス、縊死などの救法を述べている。秋田病院の印あり。			
41	深味	14	新撰方鑑	シンセンホウカン	1-5巻	ウルデンブルグ(富爾甸堡)シモン(葛路基門)撰、坪井為春鈔訳	明治8	1875	薬学	1873年普国医学校教頭ウルデンブルグと薬局司シモンの著した本を坪井為春が鈔訳し、明治8年2月18日刊行された。配剤の総論と各論を述べてある。深味の印あり。			

42	深味	9	独乙新方彙	ドイツシンホウイ		ウンデルリヒ著,桜井郁二郎訳	明治10	1877	薬学	1876年独のウンデルリヒ氏の著した本を桜井郁二郎が訳して、明治10年6月26日刊行した。内用薬、外用薬に分けてある。秋田病院、秋田医学校の印、北嶋口口の署名あり。			
43	深味	15	物理全志	ブツリゼンシ	1-10巻	カッケンボス,ガノー著,宇田川準一訳	明治9	1876	科学	1873年の米カッケンボス、1872年の佛ガノーの著したナチュラルフィソロフィーを折衷して宇田川準一が訳し明治8年1月に出版した。秋田病院の印あり。			
44	深味	13	薬舗心得草	ヤクホココロエグサ	1-3編	太田雄寧著	明治9	1876		太田雄寧著、ふりがな付で薬舗の為平易に記述している。明治9年3月英蘭堂より出版、秋田病院の印あり。			
45	深味	16	解剖攬要	カイボウランヨウ	1、3-13巻	田口和美著	明治10	1877	解剖	明治4年ミュルレルが来朝して教鞭をとった時、田口和美は大学東校少句読師で解剖所を管理した。明治6年デーニッツが専門教授となり、続いて明治9年ギールケ明治13年ヂッセと代わったが、14年田口は解剖学教授となり、18年小金井良精、30年大沢岳太郎と解剖学三教授が日本人で占められた。田口は後に日本医学会々頭をつとめたが、この本はデーニッツの説に独英二国の書を参考にして編輯したもので明治10年7月26日出版された。秋田病院の印あり、又、那小屋の印が押してあるのは那小屋大助、(秋田医学校教諭)が、講義に使用したものであろう。			
46	深味	5	理学的打聴診論	リガクテキダショウシンロン	1-3巻	パウル・ニーマイル著,桜井郁二郎訳	明治13	1880		1873年ドイツのニーマイルが著した本を桜井郁二郎が訳して明治13年に出版した。打診板なども使用し詳細に述べている。秋田病院、秋田医学校の印あり。			
47	深味	17	内科簡明	ナイカカンメイ	1-14巻	撰訳(Kunze,Karl Ferdinand)撰,林洞海、石川桜所、石黒忠徳訳	明治9	1876	内科	日耳曼撰設氏の原著を訳したもの。内科諸病に就いて述べてある。明治9年7月刊。各県医学校で広く使用された。秋田病院の印あり。		林洞海(1813-1895)幕末明治期の蘭方医。豊前国小倉篠崎村(北九州市小倉北区)生まれ。名は彊、字は健郷、号は梅仙、堂号は存誠齋。江戸に出て足立長雫の門に入り蘭方医学を学び、2度長崎に遊学。江戸に帰り、同門の佐藤泰然が佐倉に移ったあとの旧宅を譲り受け、泰然の娘を娶って開業した。小倉藩医から幕府医官となり奥医師、法眼に進み、維新後は静岡藩沼津病院副長を務めたのち新政府に出仕。大学中博士、大阪医学校長、権大典医、皇太后付、4等侍医等を歴任した。長男は研海。東京で没し、駒込吉祥寺に葬られた。著訳書に『ワートル薬性論』『内科簡明』(共訳)がある。〈参考文献〉村上一郎『蘭医佐藤泰然—その生涯とその一族門流—』〈出典〉『朝日日本歴史人物事典』／石川桜所(1825-1882)江戸後期-明治時代の医師。文政8年生まれ。西洋医学を江戸の伊東玄朴(げんぼく)や長崎のオランダ人にならぶ。陸奥(むつ)仙台藩医をへて、幕府の医官、徳川慶喜(よしのぶ)の侍医となる。明治4年兵部省にはいり、軍医監にすんだ。明治15年2月20日死去。58歳。陸奥登米(とめ)郡(宮城県)出身。名は良信(よしのぶ)。別号に陸舟庵。	
48	深味	15	内科提綱	ナイカテイコウ	1-3巻	シェミット(悉密篤、Schmidt)撰,佐々木東洋補訳	明治9	1876	内科	ドイツ悉密篤シェミットの原著「コンペンヂュム デル インネルンクリニク」を佐々木東洋が補訳し、明治9年12月に出版した。秋田病院の印あり。		佐々木東洋(1839-1918)幕末明治期の内科医。雲雲堂医院の創立者。無住、師興と号した。江戸本所生まれ。下総国(千葉県)佐倉の順天堂を経て、長崎でボンベに学ぶ。慶応2(1866)年軍艦齋藤の医官、さらに大学東校(東大)権大助教、内科部長、医学校付属病院院長を歴任。この間に死体解剖を行い、西南戦争に志願従軍した。神戸の脚気病院主任(洋方)を経て、明治14(1881)年東京駿河台に雲雲堂医院を設立。順天堂とともに有名医院として知られ、医院は佐々木政吉、佐々木隆興、佐々木廉平らに引き継がれ現在に至る。24年東京府医師会会長となり、開業医の学術進歩に尽くす。仏教にも関心が深かった。著書に『診法要略』(1872)、訳書に『内科提綱』(1880)がある。〈出典〉『朝日日本歴史人物事典』	
49	深味	11	須准氏眼科必携	ガンカヒツケイ	1-11巻	須准傑児撰,阪井直常訳	明治9	1876	眼科	日耳曼須准傑児氏の原著を阪井直常が訳し、明治9年8月19日出版した。秋田病院、秋田医学校の印が押してある。			

50	深味	14	外科通論	ゲカツウロン	12-22、24-25巻	佐藤進述ビルロート著	明治13	1880	外科	佐藤進の代表的訳書、全25巻、1874年版ビルロート外科総論 Die allgemeine chirurgische Pathologie und Therapie 主な據り所とし、その他取捨選択して講義し、それを門人が筆記した。ビルロートは50章、進は49章であるのは前者の第一章を後者は総論として章としていない為である。初版は明治9年。内容の一部次の通り、[巻12、第14編 軟組織慢性炎][巻13、第15編 潰瘍論 第16編 慢性骨膜炎、骨炎、骨疽][巻16、第17編 慢性関節炎][巻18、第18編 先天性筋及び神経、疾患二因シ或ハ痲痕収縮二因スル関節彎曲諸症 第19編 静脈怒張及び動脈瘤][巻19、第20編 贅腫論]巻25は明治13年7月出版。秋田医学校の印あり。		
51	深味	12	病理各論	ビヨウリカクロン	1-8巻	マンスフェルト(漢斯敬克著、Marshall C.G.van 高橋正純撰 佐藤方朔訳)	明治11	1878	病理	大阪病院教師満斯敬克(マンスフェルト)が生徒に講義のため著し、大阪病院長高橋正純撰、佐藤方朔訳、松尾耕三校で明治11年9月10日出版。呼吸器諸患、循血器諸患、消化器諸患、泌尿器諸患、神経系諸患、運動器諸患、皮膚諸患、全身病篇、慢性伝染病、動脈性伝染病、伝染二關係セザル滋養妨碍諸物に分け剖驗、症候、治方を述べている。秋田病院の印あり。	高橋正純(1835-1891)幕末-明治時代の医師。天保(てんぽう)6年6月28日生まれ。高橋春圃の長男。横井小楠(しょうなん)に漢学を、青木周弼(しゅうすけ)らに医術をまなぶ。長崎でボンペ、ボードインらについて西洋医学をおさめ、長崎病院塾頭となる。肥後熊本藩医をへて、維新後、大阪医学校長兼病院長などを歴任。明治24年1月28日死去。57歳。肥後出身。初名は文貞。号は清軒。〈出典〉『デジタル版 日本人名大辞典+Plus』 講談社	
52	深味	17	伝染六病論 第二版	デンセンロクビョウロン		田中畔夫訳	明治15	1882	内科	1879年ドイツのニームルの内科書、1880年英国ロベットの内科書を本にし、滋賀県平民田中畔夫が訳し明治14年に出版した。虎列刺篇、腸窒扶私篇、発疹窒扶私篇、実布埜利亜篇、赤痢篇、痘瘡篇、水痘、牛痘などに分かれ名義、定性、由来、原因、剖検、症候、持続及転帰、合併及繼発症、異類症、病理、死亡比例、予後、鑑別、予防法、療法、薬剤の各項目に就いて詳細に述べている。「福井県吉田徳三郎之章」の印が押してある。	橋本綱常(1845-1909)明治期の医学者。日本赤十字社病院初代院長。福井藩医橋本彦也の3男として福井城下常盤町に生まれた。幕末の志士橋本左内の末弟。幼名破魔五郎。8歳で父を失い、母梅尾の手で育てられた。安政2(1855)年、左内が藩医をやめ御書院番組に転じたとき、11歳で家業を継ぎ左内を国事に専念せしめた。文久2(1862)年長崎に行き蘭人シントラーに師事し、慶応1(1865)年再度長崎に行きボードインに学んだ。戊辰戦争には医師として従軍。外科手術にいち早く近代消毒法を導入し、外科学の進歩に寄与した。維新後は陸軍省に出仕し、明治5(1872)年ヨーロッパに留学。10年帰国して陸軍軍医監となり、また東大医学部教授として外科学を講じた。17年渡欧し、ジュネーブ条約(赤十字条約)について調査。帰国後の19年、日本赤十字社病院開設とともに院長に就任した。18年軍医総監。40年子爵。〈参考文献〉福田源三郎編『越前人物志』、福井県医師会編『福井県医学史』〈出典〉『朝日日本歴史人物事典』	
53	深味	8	洋算獨学	ヨウザンドクガク	1-5編	橋爪貫一著	明治4	1871	科学	明治4年、橋爪貫一の著した西洋算術の本である。数字の表示に始まり、加減乗除と進み、我国の実情にあった例題を出して解答を示している。比例、平方根、対数などからなり高度のものにも及んでいる。		

54	深味	13	衛生新論	エイセイシンロン	上、下巻	緒方惟準編	明治5	1872	緒方惟準の著 [巻之上 食物 飲液] [巻之下 空気 運動 浴法 延後廣嗣] 延後廣嗣の項には生殖器の生理病理から養生法に亘って詳記してある。	緒方惟準(1843-1909)幕末明治期の蘭方医。蘭方医緒方洪庵の次男。大坂生まれ。母は八重。洪斎と号す。幼くして加賀大聖寺の渡辺卯三郎(洪庵の門人)について、漢学と蘭学を修め、安政5(1858)年長崎に遊学して蘭医学を学んだ。文久3(1863)年父の死により江戸に戻り、西洋医学所教授に任じられた。慶応1(1865)年幕府の命によってオランダに留学し、明治1(1868)年7月に帰国、同年9月京都の典薬寮の医師となった。これは朝廷の任命による最初の洋方医である。同年10月東京の医学校および大病院の取組となったが、2年2月医学校を辞し、大坂に設立された浪華仮病院の院長に就任し、オランダ軍医ボードインと共に病院の運営に当たった。4年陸軍軍医、18年には陸軍軍医学会長兼近衛軍医長となった。このころ軍隊にはびこっていた脚気の予防策として、麦飯給食を実施して好成績をあげたが、軍中央の認めるところとならなかった。20年4月陸軍を辞して大阪に帰り、緒方病院を開設して自ら院長となった。〈著作〉『衛生新論』〈出典〉『朝日日本歴史人物事典』
55	深味	7	博物新編	ハクブツシンベン	1、3集	ホブソン(Hobson, 合信) 著	不明		英国の医師合信の著を漢文に訳した中国の本である。〔一集 地気論 熱論 水質論 光論 電気論〕〔三集 鳥獸略論 猴類 象論 犀論 虎類論 虎論 豹論 犬類 熊 罷論 馬論 駱駝論 齧獸論 胎生魚論 鷹類論 無翼禽論 涉水鳥〕当時の医師は物理学、生物学にも広く通じていたことが判る。深味の印あり。	
56	深味	13	登高自卑	トウコウジヒ	2-4巻	村松良肅編	明治5	1872	科学 静岡村松良肅抄輯とあるが、西洋の科学全般について述べたもので、明治5年の出版である。二、「水説」のはじめには「水ハ往昔ヨリ地水火風ト云テ 四元行ノ一種ト爲シ數ヘ来レドモ 中舎密術開ケシヨリ之ヲ分析シテ水ハモト一分水素トハ分ノ酸素ト抱合シテ成シモノナルコトヲ知ル」と書かれている。水説に続いて火説、光説、電気説、動静説、舎密略説、天文略説、植物説、動物説、撰生略説の各章に分けて書いてある。(三)及び(四)の最後を紹介する。「人口ノ員数ハ大略亜細亞洲ハ六億五千二百万人、歐羅巴ハ二億六千五百万人、亞弗利加ハ七千万人、亞米利加ハ五千八百万人、阿西亜ニハ二千万人ナリ」「今日撰生ノ大綱ハ蓋シ左ノ箇條ニ帰ス〔第一 飲食ヲ節シ適宜ノ滋養物ヲ用フベシ〕〔第二 不消化ノ食餌ヲ避ケ鋭烈飲料ヲ廢スベシ〕〔第三 常ニ新鮮ノ大氣ヲ吸引スベシ〕〔第四 日々清氣中ニ運動スベシ〕〔第五 身体ヲ清浄ニシ屢々沐浴スベシ〕〔第六 適宜ニ筋骨ヲ勞動スベシ〕〔第七 己ガカニ応スル事務ニ従事シテ精神ヲ励マシ懈怠ナカルベシ〕〔第八 晝夜間ニ大約八洋時間、寢息安眠スベシ〕」	村松良肅(1827-1879)幕末-明治時代の医師。文政10年生まれ。坪井信道に蘭方をまなび、明治2年静岡藩立静岡病院の医師となる。9年県立(現市立)静岡病院の開設につくし、病院幹事。明治12年10月5日死去。53歳。駿河(するが)(静岡県)出身。名は肅。号は晚村。著作に「登高自卑」など。〈出典〉『デジタル版 日本人人名大辞典+Plus』 講談社
57	深味	18	外科説約	ゲカセツヤク	1-20巻	ヒセル著、石黒忠恵編	明治6	1873	外科 明治6年10月刊行の外科学教科書。全20巻。原本はウィーン医学学校のヒセル教授が著したもの。石黒の自序には次の様に書かれている。「……夫医学ハ独逸ヲ以テ宇内ノ冠トシ維那ト伯靈トハ大家群居ノ地ト称ス、就中伯靈ノ諸家ハ学説ニ長シ維那ノ諸家ハ治術ニ長スルハ我曹當テ聞ク所ナリ……」予数々訳述スレトモ腹中文字ナク往々訳字ニ窮シ焦慮シテ訳字ヲ下スモ基ヲ自ラ安ンセサルモノ多シ、故ニ此際ニ当テハ訳字ノ傍ニ原語ヲ録シ以テ後哲ノ訳ヲ俟ツ」今日の外科学の外、整形外科、皮膚科、泌尿科に亘っている。巻の二十の最後に「誤正」と題して「古人曰書ヲ著シテ後日之ヲ訂正スレバ恰モ霜葉ヲ掃フカ如シト……況ヤ本編ノ如キ予カ劇職ノ余暇ニ成リ……頗ル校閲ノ功ヲ欠ケルモノニ於テヤ……」と述べ各巻の訂正を列記してある。最後の項には次の様に記してある。外科説約 図入二十冊 定価金五円二十五銭 明治八年十月十八日版權免許 纂述者 新潟県平民、陸軍一等軍医正 正六位 石黒忠恵 住所 東京第三大区五小区 牛込袋町二十六番地	石黒忠恵(1845-1941)明治-大正時代の医師、軍人。弘化(こうか)2年2月11日生まれ。石黒忠篤(ただあつ)の父。幕府医学所にまなび、明治4年兵部省軍医寮にはいる。21年軍医学校長、23年陸軍軍医総監、陸軍省医務局長。35年貴族院議員。大正6年日本赤十字社長。近代軍医制度の確立につとめた。昭和16年4月26日死去。97歳。陸奥(むつ)伊達郡(福島県)出身。本姓は平野。初名は忠恕、のち忠徳。号は況翁(きょうおう)。〈出典〉『デジタル版 日本人人名大辞典+Plus』 講談社
58	深味	7	醫經濟洵集和語鈔	イケイソカイシュウワゴジョウ	2巻	岡本一抱著	不明			